☆ 国民と自衛隊とをつなぐ架け橋
☆ 会員と関係者相互の親睦と情報交換

隊友よこはま南

第５２号
2025年３月26日
公益社団法人隊友会
横浜南支部
発刊責任者　田原昭彦

『雨に濡るる一杯のコーヒーの想い』

横浜南支部長　田原昭彦

一、自衛隊を退官して１４年が経ちますが、退官して変わったなと思うことが二つあります。

その一つは、挙手の敬礼を全くしなくなったことです。防大時代から数えられないほど挙手の敬礼を指導され、任官してからも一日に何度も敬礼をしてきました。上司への敬礼、同僚への敬礼、そして答礼。言い過ぎではないと思うのですが、敬礼をしなかった日は殆ど無いのかも知れません。この文書を書くために久しぶりに敬礼をしてみました。制帽がないので手元に残してある部隊レンジャーの教官帽を被って敬礼をしてみました。鏡に映る自分の敬礼姿に「うん～」、中々決まっていました。自分で言うのも何ですが上手です。目と帽子のつばの間に中指が触れて指先まで真っ直ぐに伸びています。その挙手の敬礼ですが、退官をしてからは全くと言ってもいいほどしていません。

退官して変わったことの二つ目は、雨の日、傘をさすようになったことです。現役時代、制服着用時や戦闘服装の時には、雨衣やポンチョを着用するため、傘はさしません。服務規則には雨衣を着用するものとすると書かれていて、傘をさしてはいけないとは書いていません。もちろん、戦闘時に傘をさすことは常識的に考えられませんが、少なくとも、平時においては制服や戦闘服に傘をさすことはありませんでした。現役時代、制服を着ていて雨に濡れること、ましてや戦闘服で濡れることは普通です。全身がびしょ濡れになることは当然でした。ただ、びしょ濡れになることを好き好んではいませんでした。半長靴が濡れて足先までびしょ濡れになると戦意が失われるような気がして嫌でした。幹部レンジャー養成訓練の最終想定で、海上自衛隊の輸送艇からボートに乗り換えて伊豆半島に上陸をするのですが、上陸地点で足が濡れないように上陸しようとしたら同行教官に指導され仕方なく海に足を突っ込んで半長靴がずぶ濡れのまま上陸をさせられました。これは教育の一環だったのでしょうが、その後の山地機動ではふやけた足にまめができて大変な思いをしました。そんなことを皮切りに雨に濡れることに対しての抵抗感もなくなり、教育訓練を通じて、戦闘における自然への同化がいかに自分自身と同僚、そして何よりも隊員を含む部隊全体の命と安全を守り抜くものであるか身をもって体得しました。そんなことが３４年余り続いていたのですが、退官後は雨に濡れることが嫌で嫌で直ぐに傘をさします。靴も濡れるのが嫌で膝までの長靴を履くこともあります。雨に弱くなっています。自然に対して弱くなっています。と同時に、培った野性味も年々薄れてもいます。気がつけば、この弱さは、自衛隊で教わり身につけた内面にも影響を与えてしまっていました。

二、隊友会横浜南支部の大切な活動の中に、「隊友」新聞の発送作業があります。この発送作業は隔月行っており、作業のほとんどは支部の理事役が行っています。隊友会本部から送られてくる新聞が届く隔月の１５日を過ぎた毎水曜日が作業日です。毎回作業員を募り、都合がつく役員が県本部事務局に集まります。お仕事で参加できない人もいますが、毎回十人前後の役員が集まります。作業は、１４時００分から約３時間です。受け取られる会員の皆様に思いを込めて発送作業を行います。

発送には新聞の折り込みが必要なため、手指が新聞の印字で汚れます。手指が黒く汚れるまで作業が続けば、休憩時間になります。休憩時間にあわせて、支部事務局

長が少しお腹の足しになる物を買ってきてくれます。喫茶店を経営するマスターである理事役がコーヒーを入れてくれます。

　或る作業日の休憩時のことです。マスターが挽いた豆を使ってコーヒーを入れて一人一人に配るのですが、これには少し時間がかかります。支部長だからでしょうか、私には比較的早く配ってくれたので、私は冷めると美味しくないからと思わず一口飲んでしまいました。その時マスターの声が聞こえました。「先輩、どうぞ。冷めると美味しくありませんから」と、ある先輩理事役にコーヒーを勧めます。その声に先輩が、「皆に行き届いたの?足りているの?」と。私は、ハッとしました。その先輩は元陸上自衛官です。直ぐさま私の脳裏に浮かんだのは、普通科中隊長時代の自分でした。野外での食事の時は、食事が隊員全員に配り終えるまで箸をつけませんでした。一斉配食が終わって、その終了報告を受けてから食事をしました。今は自衛官ではないのですが、私がハッとしたのは、何だか大切なことを忘れかけているように思えたのです。

　そんなことがあってから数日経ってのこと、２０２５神奈川自衛隊音楽まつりの会場で、開場前準備の休憩時間に、乗艦時の当直や見張りの食事の話になりました。元海上自衛官の先輩から、乗艦時には全員が一同に会して食事をすることはないとの話を伺いました。乗員が一堂に会しての食事だと艦は動きません。見張りもできません。一斉配食が終わってからの一斉食事は時と場合によります。このことは海自だけでなく陸・空自も同じでしょう。食事をすることは人間の生死に関わりますが、食事の取り方は、事に臨んでは危険を顧みない崇高な職務に身をもってその任に当たる部隊・隊員の安全と命に関わります。何よりも、そこに苦楽をともにする部下、同僚、上司に対する愛情が存在します。

「隊友」新聞の発送作業に頂いたコーヒーは、たかが一杯のコーヒーでしたが、されど一杯のコーヒー、その味は濃いかったのです。

　三、「ある兵士の手記」は、学生時代の統率の時間に教官が題材にしたものです。この本の著者は、宮前鎮男氏です。昭和１５年から昭和１７年にかけて中支派遣歩兵連隊の分隊長だった宮前氏は陸軍士官学校を卒業した青年将校、上法真男氏を知り、その後、小隊長、中隊長として仕えます。その当時の記録を本にしたものが、この「ある兵士の手記」です。

　この本が記録された当時の状況は、激烈な戦闘場面の状況と言うよりか、どちらかと言うと、比較的平時に近い状況でした。敵とは持久的対陣状況にあり、教育訓練や営内生活、お正月の祝い酒もあるというものでした。そうした中において、部下である分隊長が小隊長・中隊長の人となりを記録したのでした。その本の副題は、「かかる中隊長ありき」でした。

　私はこの統率の時間に出会った上法中尉の生きざまを、私自身の小隊長・中隊長時代の目標としてきました。もちろん、戦争当時と情勢は違いますし、最終的に私は、目指す統率の域には達することはできませんでしたが、この本を自宅で久しぶりにコーヒーを飲みながら少し読み返してみました。

　・・・「兵隊は自分より早く寝る上法中尉、自分より遅く起きる上法中尉を知らない。これは日常の警備勤務の時でも、激しい作戦行動の時でもそうであった。指揮官として兵の上に立ち、団結の核心として、常に兵と苦楽を共にしようとする上法中尉の、強烈な願いと、意志による、常任不断の行の姿でもある。」、・・・訓練の時にも「雨も泥も全く眼中になく、ただ兵を鍛えよう、兵と共に武を練ろうとする高らかな意志と希いがあるばかりで、ー兵が五濡るる時は、指揮官は十濡るるのみーという上法中尉の心は常に胸打たれる思いであった。」・・・

　この、「兵が五濡るる時は、指揮官は十濡るるのみ」は私を大いに叱咤した金言でした。

　退官して１５年目の春を迎えながら、自衛隊で学び身につけていた事が少しずつ消えかけていることを実感しています。獣道を嗅ぐことも発見することもできにくくなっています。

　そんな中、「隊友」新聞や「横浜南支部会報」等の発送作業を通じて、作業に従事してくれています元陸海空自衛官の仲間の皆さんが大切なことを思い出させてくれています。

編集：「笑顔無敵」、辛いときに笑顔になることは難しいです。でも、笑顔ほど強い味方はありません。

令和７年度 横浜南支部総会 ご出席へのご案内

①日時：令和７年４月２７日（日）
　１３時３０分～１４時３０分
②場所：ウィリング横浜
　京浜急行上大岡駅徒歩３分
③会場：１２階 研修室１２１
　総会後、令和７年度・前段 横浜南支部国民保護勉強会（第４回 講演会）及び懇親会を計画しています。
④国民保護勉強会（講演会）につきましては、次項記事をお読みください。
⑤会員相互の親睦を深めるため懇親会を次のとおり計画しています。
　日時：令和７年４月２７日（日）
　１７時４５分～１９時４５分
　場所：せんざん 港南台本店
　ＪＲ根岸線港南台駅徒歩６分
　会費：七千円（税込み・椅子席）
　送迎バスを京急上大岡駅（総会会場近く）から準備していますので、ご安心の上ご利用ください。
なお、総会にご欠席の会員の皆様には、総会の内容、特に、令和７年度の活動計画につきましては５月の横浜南支部会報等でお知らせをさせて頂きますのでご了承ください。

令和７年度・前期 横浜南支部国民保護勉強会 第４回 講演会へのご案内

横浜南支部の令和７年度前期の国民保護勉強会は、令和７年４月２７日（日）に開催されます令和７年度支部総会の後に計画をしております。
その際に行われます講演会は、令和５年１２月に第１回を開催して以来今回で通算４回目になります。
本講演会は、横浜南支部主催の国民保護勉強会における一環です。この勉強会では、国民保護法等に関わる基本的なことを今一度学び直し、その勉強等を通じて地域社会に貢献できる国民保護についての知識力をアップすることを目的とすると共に地域で活動する隊友会員に何かを期待されるような状況が生起した時には、その知識力が正しい活動等に結びつくことができることを目標として、令和５年度から実施をしています。
今回は、元中国防衛駐在官であり、元陸自第１０師団長、その後は、東京都知事石原慎太郎の招聘をうけ、元自衛官としては初となる東京都危機管理監に就任されご活躍なさいました元陸将 宮嵜泰樹様 を講師にお迎えしての講演会になります。
演題は、『中華文明の本質と最近の中国政治・経済・軍事情勢』です。

１月２０日に「米国第一」を掲げて二期目のトランプ政権が始動して約２ヶ月、トランプ大統領の言動に世界は振り回されています。石破総理の訪米、初の日米首脳会談は成功のように思えましたが、トランプ大統領の東アジアの安全保障に関する真意はどこにあるのか、油断ができないところです。そこに見え隠れする中国。中国の王毅外相は３月７日、開会中の全国人民代表大会の記者会見で、台湾については「必ず統一する」と断言し、「日本には『台湾独立』勢力と密かに通じる人がいる」、「台湾を口実に面倒を起こせば、日本にも問題が起こる」とし、日米首脳会談で発表された共同声明で台湾問題の「力または威圧による一方的な現状変更の試みに反対」と明記したことに不満を示したと伝えられています。
平和的な解決はともかくも力による統一を辞さない中国の対応はいわゆる台湾有事は日本有事と考えられても当然のことです。一寸先が見えない国際安全保障の中でこの現状を中国の専門家の宮嵜元中国駐在武官はどう読み解くのか。興味のあるところであり、皆さんの疑問・懸念に大いに答えて頂けるのではないかと思っております。
今回も、県隊友会本部、横須賀水交会、県郷友会、県偕行会、県自衛隊家族会のご後援を頂いての開催となります。
会員の皆様には、どうぞお知り合いの方もお誘いの上ご出席を頂ければと思っております。
①日時：令和７年４月２７日（日）
　１４時３０分開場
　１５時００分開講
　１６時４５分閉講
②場所：ウィリング横浜
　京浜急行上大岡駅徒歩３分
③会場：１２階 研修室１２１
④受付：研修室１２１入口付近
⑤参加費：無料
⑥申込み：４月２１日（月）までに

E-mail ： aki-tb5@jcom.home.ne.jp
田原昭彦までお願い致します。電話連絡（田原昭彦：090-5038-6087）でも構いません。

講演会終了後、１７時４５分から会場近くで講師を囲む懇親会（総会後の懇親会も兼ねて計画）を行いますので、ご都合がよろしければ併せてお申し込みください。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

お申込みの内容に含んで頂きたい内容は、参加者氏名・住所・連絡先（日中繋がる電話番号）・団体等名です。

『昨日の友は今日の仇』
同盟関係における軍人同士の信頼・友情は儚いものなのか

トランプ大統領は、3月6日、ホワイトハウスで記者団に対し、ＮＡＴＯ加盟国の国防費の支出が少なすぎるという認識を示す中で、「彼らが払わないのであれば私は彼らを守らない」と述べたとの報道がありました。

この話の中で、大統領は日本についても言及し、「日本を好きだし、日本とはすばらしい関係にある。しかし、日本との間には興味深いディールが存在する。われわれは日本を守らなければならないが、日本はわれわれを守る必要がない。直接は関係しないが、日本はアメリカとの間で経済的に富を築いた。しかし、いかなる環境においても日本はわれわれを守らなくてよいのだ。いったい誰がこんなディールを結んだのか」と、日米安全保障条約の内容が不公平だと不満を述べたとの報道もありました。

こうした発言は、大統領就任一期目にも当時の安倍首相に対しても伝えられたと聞きます。

なるほど日本は、米国を守る義務を負いません。ただその分、基地を提供する義務を負い、ある面犠牲を払ってその義務を守っています。また、平和安全法制の制定により日米はあらゆる事態に切れ目なく互いに助け合うことが可能となっています。こうした状況の中で繰り返される発言に本当に米国は同盟国なのかと心が揺れます。

これに遡る2月21日、世界一の軍隊を保有するトランプ大統領は、軍制服組トップのブラウン統合参謀本部議長を解任しました。統合参謀本部の議長を黒人が務めるのは、コリン・パウエル氏についでブラウン将軍で史上２人目です。その解任の背景は、バイデン前大統領が進めた軍の多様性に対する反対なのか、真実は分かりません。ただそんな電撃的な解任のニュースに対して、日米同盟の現場に根付いている信頼関係を見ることができました。それは、自衛隊トップ吉田統幕長の会見における言動です。

会見でブラウン氏の更迭について問われた吉田統幕長は、「他国の軍高官の人事についてはお答えする立場にありません」と述べた後、「ブラウン統合参謀長は、私にとって最も重要なカウンターパートの一人であり、日米韓防衛協力を推進するという点、およびＮＡＴＯ諸国とインド太平洋諸国との橋渡しをするという点において、優れたリーダーシップを発揮してくれました」と、時折、言葉を詰まらせ、涙ぐみながら語ったと言われます。

吉田統幕長は、自衛隊機に対するレーダー照射問題で途絶えていた日韓のハイレベル交流の再開や全世界に対する日米同盟の抑止力・対処力強化の重要性の発信等に関するブラウン氏の功績を称えたそうです。

ブラウン氏の突然の更迭を報道で知ったという吉田統幕長の言葉と涙ぐむほどの感情は何でしょうか。同盟国とは一緒になって戦う存在です。場合によっては部下の将兵を死に至らしめることになるかも知れません。そんな過酷な状況の中で必要となり、そのために平素から培われる軍人同士の信頼・友情関係。これも戦わない人にとっては、「昨日の友は今日の仇」であり儚いものなのか。

これはもちろん平時の話になります。私には現役当時、米国本土のヤキマ訓練場で射撃訓練を指揮する機会がありました。約２００名の訓練部隊でした。順調に進んでいた訓練の最中、隊員が広大な射撃訓練場で負傷をしました。その対応に、米軍は搬送のためにヘリを手配するなど、それはそれは迅速な対応をしてくれました。その対応で、負傷した隊員は大けがでしたが幸いなことに命に別条はありませんでした。私はこの時ほど米軍に感謝したことはありませんでした。そして、その感謝の気持ちは米軍への信頼に変わりました。何かあれば彼らは動いてくれる。我々もそうであらねば。

今日も現場では軍人同士の信頼・友情関係を培うための地道な努力が続いています。感謝しかありません。